

令和3年5月1日

エンジニアリング協会 関係者の皆様へ

一般財団法人 エンジニアリング協会
専務理事

前野 陽一

3月21日に、東京都などに発令されていた「緊急事態宣言」がようやく解除されたと思ったら、今度は、4月12日から5月11日まで、東京都は、「まん延防止等重点措置」の対象となり、更に、この措置が「緊急事態宣言」に格上げ(?)されることとなりました。「緊急事態宣言」も3回目ともなると、営業自粛を求められる業界からかなりの反発が見られ、また、「まん延防止等重点措置」で感染者数を抑えられなかった中で、本当に「緊急事態宣言」の効果があるのか、といった懐疑的な意見をおっしゃる方もおられます。いずれにせよ、「自粛生活」が継続されることに変わりはない、ということだと思っています。

私の知る限り、2度目の「緊急事態宣言」が解除された後も、多くの会員企業ではリモートワークを推奨されています。当協会においても、3度目の「緊急事態宣言」が発令されたこと（延長されるかもしれません。）、及び当協会の事務局職員の多くは、重症化リスクの高い高齢者であることから、引き続き、事務所で勤務とリモートワークを組み合わせています（このレターも、自宅ですべておきます）。皆様にご不便をおかけすることもあるかもしれませんが、よろしくお願い申し上げます。

以下、4月の主な活動についてご報告申し上げます。

[主要な活動内容]

1 講演会等の開催

4月は、5件のビジネス講演会を開催いたしました。特に、4月27日（火）に実施したスコットランド国際開発庁様による再生可能エネルギーや水素技術をテーマとしたセミナーには、68社から200名近い方のお申し込みを頂きました。講師のお一人は、スコットランドからの参加（現地時間：午前1時45分～）という、コロナ禍のオンラインセミナーならではのものとなりました。

5月は、特別講演会とビジネス講演会をそれぞれ2件Zoomライブ配信で行う予定です。特に、5月18日（火）に実施する予定の経済産業省資源エネルギー庁次長の飯田祐二様の講演は、募集を始めた初日に100名を超えるお申し込みがありました。「2050年カーボンニュートラル」をテーマとする講演であるため、多くの方の関心を集めているのだらうと思います。

多くの方のご参加をお待ちいたしております。

2 栃木県東京事務所、福岡県東京事務所及び熊本県東京事務所の来訪

4月の定期人事異動を受けて、4月6日（火）に、栃木県東京事務所の関本充博所長が当協会を訪問されました。この機会をとらえて、栃木県の福田富一知事へのインタビューをお願いしたところ、5月中下旬に実現することとなりました。

また、4月15日（木）には、福岡県東京事務所副所長兼東京企業誘致センター長の柴田信英様が、26日（月）には、熊本県東京事務所くまもとビジネス推進課主幹の蘇畑康生様が、当協会にご挨拶にお越しになりました。

3 元在日米国臨時代理大使 ジェイソン・ハイランド氏との面談

4月21日（水）に、元在日米国臨時代理大使のジェイソン・ハイランド様に、当協会での講演をお願いするため、お会いいたしました。ハイランド様は、2014年7月から在日米国大使館首席公使を務められ、2017年1月からは、キャロライン・ケネディ大使の帰任を受けて、在日米国臨時代理大使を務められた知日派の有力外交官です。「外交官の使命」という日本語の著作も上梓されています。

ハイランド様には、6月1日（火）に講演をお願いしております。ハイランド様は、日本語もお上手ですが、当日は英語の講演となります。ご著書（外交官の使命）に関するお話に加えて、「米中対立の中で、日本企業はどのようにすべきか」「日米首脳会談を踏まえて、日米関係をどう見るべきか」といったお話もしていただく予定です。

4 アサヒカダイ 代表 小松崎 学様へのインタビュー

4月23日（金）に、会員企業トップインタビュー第5弾として、群馬県邑楽郡大泉町に所在する製缶・機械加工品のメーカー「アサヒカダイ」の代表 小松崎 学様にインタビューを行いました。群馬県と栃木県にまたがる両毛地域（大泉町も含まれます。）は、古代の上毛野国（カミツケノクニ；現在の群馬県）と下毛野国（シモツケノクニ；現在の栃木県）を含む名称であり、独自の文化圏を形成しています。また、この地域の中心市の一つである太田市は、戦前の戦闘機製造で有名な中島飛行機株式会社の発祥の地であり、多くの製造業が立地している地域です。

こうした「ものづくり」の伝統を受け継ぐアサヒカダイ代表の小松崎 学様のインタビューに、ご期待いただければ幸いです。

5 その他

3度目の「緊急事態宣言」が発令されるなど、一向に収束の見えないコロナ禍ですが、リモートワークの増加により、日本人の運動不足の状況は悪化しているようです。文藝春秋 5月号に載せられているフィジカルトレーナーの中野ジェームス修一氏によれば、多くの日本人が体調不良を感じているようで、同氏のパーソナルトレーニングジムへの入会希望者が急増しているとのこと。また、中野氏のジムに通い始めた人たちは、平均して、筋肉量が2kg減り、脂肪量が3kg以上増えていたとのこと。同氏は、「本来は多くの人に筋トレをやっていただきたいが、運動習慣のない人には筋トレを続けることは難しいので、せめてストレッチをしてほしい」と書いています。

ちなみに、私は、今年に入って、免疫力アップと体力強化、更にはアンチエイジングを目指して、ジョギングや筋トレを行っており、4月中の月間走行距離は人生最長の300kmを越え、1月からの総走行距離は、1,000kmを突破しました。その結果、「筋肉量は1.5kg増え、脂肪量は2.7kg減る」という世間の皆様とは正反対の結果を出しております。

カナダに拠点を有する Game Changer というマーケットリサーチ会社が、世界の主要16か国（約16,000人）を対象として行った調査によれば、運動不足を感じている人の割合が最も多いのは、日本（38%）だそうです。運動不足は、新型コロナウイルス感染症を重症化させるという研究結果もあります。皆様、運動不足にならないように、注意しましょう。

また、常時マスクをつけることにより、口呼吸となって呼吸が浅くなり、頭痛など様々な不調を訴えられる方も増えているとのこと。私が教わっているトレーナーは、胸やわき腹、背中といった部分をストレッチするのが良い、と言っています。ぜひ実践してください。

5月の講演会の実施について

令和3年5月1日
エンジニアリング協会
専務理事 前野陽一

5月は、特別講演会とビジネス講演会を、2件ずつ行う予定です。全て、Zoom Web 配信で行います。多くの方のご参加をお待ちいたしております。

なお、正式なご案内は、別途お送りいたします。

1 福島復興の10年と日本の未来

(5月12日(水)) 中間貯蔵・環境安全事業株式会社 (JESCO)

代表取締役社長 (元 環境事務次官) 小林 正明 様)

東日本大震災による未曾有の災害が発生してから、10年が経過しました。

原子力事故の直撃を受けた福島県では、大規模な除染と除去土壌等の中間貯蔵施設への搬出がほぼ完了し、福島県外での最終処分が残された課題となっています。今後、除去土壌の安全な保管方法、廃棄物の減容化、土壌の再利用、更には最終処分地の選定など、様々な難問が控えています。

今回の講演では、この問題解決の責任者である小林様から、最新の状況をご説明いただきます。

経営幹部の皆様を含め、多くの方にお聞きいただければ幸いです。

2 2050年カーボンニュートラル宣言等を踏まえた

エネルギー政策の状況について

(5月18日(火)) 経済産業省 資源エネルギー庁 次長 飯田 祐二 様)

2020年10月26日、第203回臨時国会の所信表明演説において、菅義偉内閣総理大臣は「2050年までに、温室効果ガスの排出を全体としてゼロにする、すなわち2050年カーボンニュートラル、脱炭素社会の実現を目指す」ことを宣言されました。多くの賛助会員企業の皆様も、この宣言の趣旨に賛同し、様々な対策を講じようとされています。

しかし、この目標を達成するためには、多くの困難な課題を解決することが必要です。私は、政府及び政府関係機関のエネルギー政策関係者の皆様に、どなたからお話を伺うべきかお聞きしたところ、多くの方から、「実務の責任者である資源エネルギー庁の飯田次長のお話を聞くのがいい」とのアドバイスを受けました。

そこで、今回、飯田次長には公務大変お忙しい中、当協会でのご講演をお引き受けいただきました。

エネルギー関係の部門の皆様のみならず、経営幹部の皆様を含め、ご参加いただきたいと思います。

3 地球環境外交の展開 ～インフラ輸出も含めて～

(5月25日(火) 環境省 大臣官房審議官(地球環境局担当)

瀬川 恵子 様)

環境省の地球環境局は、地球温暖化問題を環境政策の視点から考え、施策を実施する部局です。今回の講師の瀬川様は、長年地球環境問題に携わっておられるプロフェッショナルであり、以前も当協会において、優れた識見をお話いただきました。

地球環境問題が喫緊の課題となっている現在、皆様のビジネスにも大きく関係するお話を聞けるものと考え、瀬川審議官には公務お忙しい中、当協会におけるご講演をお願いいたしました。

環境部門やエネルギー部門の皆様には、是非お聞きいただきたいと思います。

4 サプライチェーン上の人権問題（仮題）

（5月28日（金） TMI 総合法律事務所 弁護士 戸田 謙太郎 様
Berkeley Research Group Managing Consultant
長岡 英美 様）

現在、中国新疆ウイグル自治区やミャンマーにおける人権侵害が、世界の注目を集めています。報道規制もあって、その実態は必ずしも明らかではありませんが、欧米諸国では、「この問題を放置できない」というのがコンセンサスになりつつあり、特に、米国で人権重視のバイデン政権が発足して以降、その傾向は顕著となっています。

こうした状況を受けて、例えばスウェーデンのアパレル大手である H&M が、新疆ウイグル自治区での少数民族に対する差別や強制労働問題に伴い、同自治区にある縫製工場への生産委託や、同自治区からの製品調達を禁止すると発表し、こうした地域に所在する企業との取引を停止したところ、中国国内で H&M の不買運動が起こっています。

他方、在日ウイグル人で組織された日本ウイグル協会は、日本企業に対し、ウイグル地区の企業との取引を停止するように求めています。

サプライチェーンがグローバル化する中で、この問題を見做することはできません。今回のご講演では、専門家のお二人から、この問題の現状と対応策について、お話を伺います。

海外営業部門や法務部門の皆様に、お聞きいただければ幸いです。

[第4回]



GPSSエンジニアリング株式会社

代表取締役 **リチャーズ・フィリップ** 氏



世界に貢献する 「幸福な会社」を目指して

GPSSエンジニアリング株式会社は、サステナブルエネルギー事業を行うGPSSグループの一員として、日本国内で200MWを超える再生可能エネルギーの発電所建設実績があるエンジニアリング会社です。
今後ますます注目されるサステナブルエネルギーの利用拡大をどうすべきか、といったことを含めて、代表取締役のリチャーズ・フィリップ (Philip Richards) 様にお伺いしました。

「2050年カーボンニュートラル」 に向けて

— 昨年10月に、菅総理は「2050年までに、温室効果ガスの排出を全体としてゼロにする」という「カーボンニュートラル宣言」をなさいました。この宣言について、「表明するのが遅すぎた」という意見がある

一方、「現在の日本のエネルギー利用状況を考えれば、かなり実現が難しい」といった意見もあります。フィリップ様は、どうお考えですか。

フィリップ まず申し上げたいことは、菅総理のこの宣言は歓迎すべきであり、地球温暖化を防止するためには、様々な困難な問題があ

るとしても、必ず実現しなければならない、ということです。電力、運輸、産業など様々な分野で多額の投資が必要になると考えますが、これを単なる「コスト」と捉えずに、新たな「ビジネスチャンス」と考えるべきだと思えます。環境に配慮しつつ、同時にユーザーである産業や消費者に

は、安定かつ負担にならない料金で、エネルギーを提供しないといけないと思っています。私の母国のオーストラリアなどと異なり、日本は、再生可能エネルギーを生み出す自然条件には恵まれていませんが、優れたエンジニアリング技術があります。さらに、国際的な協力や次世代に向けた革新的な技術開発を行うことにより、必ず「カーボンニュートラル」は実現できると考えています。

GPSSエンジニアリングの役割・特徴

— 日本がカーボンニュートラルを目指していく中で、GPSSエンジニアリングの果たすべき役割は大きいと思います。まずは現在、御社はどのようなことをなさっているのか、ご説明いただけますか。

フィリップ GPSSグループの一員として、当社は5つのサステナブル

エネルギー事業、具体的には、太陽光、地熱、風力、中小水力及びバイオガスのプラント建設に携わっています。太陽光発電だけを行う、といった企業は数多くありますが、様々なサステナブルエネルギーの発電事業に携わる企業は、少ないと思います。当社も初めは太陽光発電からスタートしましたが、今後のビジネスの中心になるのは地熱、バイオガス、水力、waste to power（廃熱を使った発電）といったものになると思います。もちろん太陽光発電を止めるわけではなく、FIT制度が終了しても継続してまいります。

また、当グループの特徴として強調しておきたいのは、EPC（設計・調達・建設）を行うだけでなく、フィージビリティスタディからファイナンスの検討、さらにはO&Mまで、全てをお引き受けする、ということです。こうしたサービスには、お客様の高い満足度も得られています。当社に仕事を依頼されたお客様が、その後、

新たなお客様をご紹介くださる、という例もあります。

GPSSエンジニアリングが目指す「幸福な会社」とは

— GPSSグループの公式ウェブサイトの中に、「幸福な会社」を目指す、ということが掲げられています。具体的に、どういったことを考えておられるのか、ご説明いただけますか。

フィリップ 「幸福な会社」を目指すというのは、GPSSグループが共有する理念です。「社員が仕事で幸せを感じられない会社には、幸せな社会を実現することはできない」というのが、根本にある考え方です。GPSSグループは、エネルギー事業を通してサステナブルな社会を目指していますが、その際、社員をルールで縛り付けるのではなく、社員それぞれが幸せを感じて、主体的に働くことが必要である、と考えています。当社のビジネスの根幹にあるのは、「イノベーション」です。職場内はオープンで、上下関係はほぼなく、自由にコミュニケーションできるようになっています。その環境が、新しいアイデアやイノベーションを生む、と確信しています。また、新型コロナウイルスの感染拡大により、リモートワークも導入しています。ある社員は沖縄にいて、「朝はダイビング、8時とか9時から仕事」という生活を2週間続けました。その間の仕事の効率は良く、東京に帰ってきてからも、元気で働いています。



「三光バイナリー発電所施設」へバイナリー発電機導入時の写真

日本との出会いのきっかけは「セレンディピティ (Serendipity)」

—ここで、フィリップ様ご自身のお話に移りたいと思います。まず、オーストラリアご出身のフィリップ様が、日本に興味を持たれたきっかけは何だったのでしょうか。

フィリップ 「セレンディピティ (Serendipity)」という言葉をご存じでしょうか。「素敵な偶然に出会ったり、予想外のものを発見したりすること」を意味しますが、私と日本との出会いは、まさにこれでした。高校で、たまたま日本語を勉強したのですが、あまり熱心な生徒ではありませんでした。その後大学生になり、バックパッキングの海外旅行をしようとした際、多くの人がアメリカかヨーロッパに行くので、みんなと違うことをやりたいと思い、軽い気持ちで日本に行くことにしました。でも来てみたら、知り合った日本人、日本の文化、食べ物、自然の風景が本当に好きになって、大学に戻って、真剣に日本語を勉強し始めました。たまたま私が通っていたメルボルン大学と大阪大学に提携関係があったため、日本の文部省（当時）から奨学金をいただいて、一年間大阪大学の大学院で過ごすことができました。日本人と日本の文部省には感謝していますが、その後、いただいた奨学金は、何十倍かの税金としてお返ししました。文部省としてはいい投資だったと思います。

現在の仕事を選んだ動機は、「息子に自慢できる仕事」

—フィリップ様のご経歴を拝見すると、金融関係の仕事を長くなされ

ておられますが、なぜ畑違いの仕事に転身されたのですか。

フィリップ 金融機関で約20年間働きましたが、若い頃は特に楽しかったものです。しかし、ある時「自分の仕事は、社会に貢献しているのだろうか」との疑問を持つようになりました。そして子どもが生まれ、「息子が自慢できる仕事をしたい。自分の息子を含む次世代のために、地球環境を守るサステナブルなエネルギーを普及させる仕事をしよう」と思うようになり、現在の仕事をすることを決心しました。

—そういえば、お住まいは野沢温泉とお聞きました。

フィリップ 私はスキーが趣味で、週末にはいろいろなスキー場に行っていたのですが、野沢温泉が一番気に入りました。白馬をはじめとして山がきれいなことに加えて、コミュニティとしての一体感が強くて、本当に面白いところです。また、古くから外国人スキーヤーが数多く訪れているところであり、ドイツ語を話せる豆腐屋さんがいるなど、外国人の扱いにも慣れています。



—フィリップ様の座右の銘は何でしょうか。

フィリップ 私の座右の銘は、「Taking the road less traveled」、すなわち、「他の人と違うやり方を試す」ということです。大学生時代に日本に来たのも、この精神にのっとった行動であるといえます。また、現在の仕事の関係で申し上げれば、他のエンジニアリング会社とは違う手法を試す、ということになります。新しいアイデアとかイノベーションを実施した場合、失敗もありますが、「失敗は



Phillip Richards (リチャーズ フィリップ)

1972年	オーストラリア生まれ
1996年 4月～	大阪大学大学院 経済学研究科・経済学部 留学
1997年 3月	
1997年12月	メルボルン大学商学部卒業
1998年 7月	第一勧業銀行(現みずほ銀行)入社。その後20年にわたり、メリルリンチ、ドイツ銀行、シティバンク等の有力投資銀行に勤務
同年12月	日本語能力試験一級取得
2013年 9月	ドイツ銀行東京支店のグローバル・リクイディティ・マネジメントを担当
2019年 6月	GPSSに企画室ストラテジー担当としてジョイン
同年11月	GPSSグループ GPSSエンジニアリング株式会社代表取締役



野沢温泉スキー場にて



野沢温泉の祭りで神輿担ぎに参加（前列左から2人目）

次の成功の種」と思っています。日本では、数多くのエンジニアリング会社があります。日本の大手エンジニアリング会社と同じことをやっても、当社のような新興勢力に未来はありません。例えば、海外の優れたパートナーと協力してプラントをつくるなど、新たな試みが不可欠です。お客様には完璧なプラントをお引渡ししなければなりません、その過程においては、様々な「Try & Error」

も必要である、と思っています。先ほど申し上げた通り、今後とも太陽光発電プラントも扱っていきませんが、個人的には、競争相手が少なく、イノベーションが発揮できる地熱、バイオガス、水力、waste to powerといった分野に注力していきたいと思っています。

—— 本日は、ありがとうございます。



インタビュー後記

リチャーズ・フィリップ（Phillip Richards）様は、日本語能力試験一級を取得されておられ、インタビューも全て日本語で行いました。大変明るいキャラクターをお持ちであり、私も楽しくインタビューをすることができました。今回は、仕事の関係を中心としたお話でしたが、野沢温泉のコミュニティ活動にも、深く関与されておられることに、感銘を受けました。

聞き手：当協会専務理事
前野 陽一

会員企業データ

社 名：GPSSエンジニアリング株式会社
事業内容：持続可能エネルギーに係る
EPC・O&M・技術開発
設 立：2012年10月
所 在 地：東京都港区芝2-5-10 芝公園
NDビル 6F
従業員数：144名（2021年4月時点）
ホームページ：<https://gpss.jp/engineering/>

